

百合なら許すと彼女は言いました

日記の葉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女は願う。

たったひとつの救いが続くことを。この先の未来に、彼女たちの笑顔があることを。

けれど少女は迷う。

その未来に、自分の居場所があるべきかを。

騒がしくも楽しい日々は一転し、一人の少女と歌姫はその日、魔王と天使に出会う。

というお堅いお話は置いときまして、本当は私と真里奈さんたちの楽しい楽しい日常を――。

目次

百合と星より	1
魔王と天使へと	9

百合と星より

自室で一人寝転がる少女は、ひとつの悩みを抱えていた。

(世界というのは理不尽だ。どうして私にこんな呪いめいた力を授けたのか。私でなくてはいけない必要はなかったはずだ。けれど、他の誰かが背負うよりは、私が背負う方がいいはず。まあ、その結果がこのざまか……)

彼の両親はとつくの昔に他界している。

死因ははっきりとわからなかったらしい。ただ、発見者の証言では、この少女を抱いたまま死んでいたという話だ。

この少女には、いくつも奇妙な話がある。遊びに来た友人が帰ってこないだの、一緒に暮らしていた親戚の人が失踪しただの。思い出してみれば、他にも数多くの話が出てくることだろう。

つまるところ、少女と一緒に居ると、不幸な目に遭うということだ。本当に起きたことかどうかは、本人に聞いて確かめる他あるまい。

ひとつ言えることがあるとすれば、この少女——・真里奈もまた、世界に嫌われた者の一人だということだ。

真里奈にたったひとつ救いがあったとすれば、幼くして親族を失った彼女を引き取ってくれた家があったということだろうか。

人といると、無意識に傷つけてしまうと畏れている少女にとって、家族は例外中の例外であり、特に、妹は自分と一緒に居てもなんの影響も受けない。

もう何年も前のことになるが、そうして自分を迎えてくれる家庭があったことに、当時は感謝してもしきれないほどだった。引き取られ、迎えられたその瞬間、涙を流したのを覚えている。

いまにして思えば、泣いたことはあれ以来一度もない。思い出すとなんて恥ずかしいことだろうか。

そのようにしか感じられないほどには、真里奈もまた、こどもである。

けれど、彼女の中には、いまでもこどもには背負いきれないほどの力と思いが吹き荒れているのであった。

(眠い……まだ寝ていたい……)

昨日は遅くまで考え事をしていたせいか、簡単に起きれる気配はない。

だが、もうじきこの安眠は妨げられてしまうだろう。なぜなら、彼女の部屋の外から、軽やかに足音が響いてくるのだから。ついでに、鼻歌まで聞こえて来る。

「おはようございますう、起きてますか？ 起きてませんよねえ、真里奈さくん」

部屋に入ってきた声の主を確かめることもなく、真里奈は眠ろうと足掻く。

だが、結果的に、それは悪手だったのだろう。

「うふふー、寝ちゃってますねえ。寝顔もかわいいですよ、真里奈さん。こんな愛らしい寝顔なら毎朝見てられますう」

真里奈の部屋にうきうき気分でやってきた少女——誘宵美九は、ベッドの上で眠る真里奈を眺めながら、荒い息を吐く。

これで普通の少女であったなら、紺色のセーラー服に身を包んだ、淑やかそうな女の子に映っただろう。シュシュで一つにまとめられた長い髪に、朗らかな表情に飾られた美しい貌——いまは若干朗らかではないのだが。抜群のプロポーションを持ちながら、それを誇示することなく、膝下スカートの制服をきつちりと着込んでいる。

「ですけど、あまり待たせると琴里さんに怒られちゃいますし起こしませうかあ」

名残惜しそうな美九は、しかし真里奈を起こそうとするも、なぜか真里奈の頬をついたり、肌に触れてはキヤーキヤーと騒ぐ。

が、平和（と思われる）光景はここまでだった。

「よいしょつと」

なぜか彼女に馬乗りになった途端、一度真里奈から降りると、そつと布団をめくる。

「あらあ？」

布団の中を目にした瞬間、彼女の目が輝いたように見えた。それもそのはず。

真里奈の懐には、小さな体を埋めるようにして丸まった、金色の少女が寝息を立てていたのだから。

「なんですか？ この神々しい光景は！ おっほっほっほっほっほっほっほっほっほ！ もう変な声しか出ませんよお……」

口元を押さえ、真里奈の上で腰をくねらせる美九。

金色の少女は上にかけられていた布団がなくなっただけ、身をひとつ震わせると、小柄な体躯に似合わない豊満な胸が主張する。

だが、彼女を構成する要素で最も目がいくのはそこではなく、カーテンの隙間から漏れる日の光に照らされて光、長く、長く伸びた金色の髪なのだ。

その幻想的な色味に、ついと手が伸びる美九だが、すんでのところで手を引き戻す。

「危ないところでした。さすがに、女の子が本当に望まないことをするのは、私の主義に反するですよねえ」

布団に大きく広がる金色の糸は、いまでも眠ろうと足掻く真里奈以外に触らせることを良しとしないことを知っているので、苦渋の選択をするように迷う顔を見せながらも、彼女の手は真里奈へと伸びていく。

「まい りとる さんくちゅありですねえ」

だいぶとろけた声を上げながら、スツツと美九の手が真里奈の脇に触れ、わさわさと動き出す。

「ああん、やっぱり真里奈さんってそりますよねえ」

これには耐えかねたのか、起きる気のなかつた真里奈も反応を示す。

「ひやつ！ ま、やめて美九！ やめ、てええええええええええ！」

力が抜け布団が剥がれると同時に、なにかとてもかわいい声が聞こえた。

「あらー、ここですかあ？ それともこっちの方が気持ち良いですかねえ？」

身体に至るところを撫でようとする美九に、抵抗しようとする真里奈。寝起きとは思えない光景である。

「こら美九、さりげなく胸まで揉まないの!」

「ええーいいじゃないですかあ。私と真里奈さんの仲なんですから、これくらい普通ですよ」

「嬉しそうに言ってもダメなものはダメに決まってるでしょバカアアアツツ!」

今朝も五河家に真里奈の叫び声が響く。

「……………ふむん? なんじゃ主様。もう起きるのか?」

この騒動で目を覚まさないはずもなく。

金色の少女——星宮六喰は目を擦りながら起き出す。

まだ眠いのか、それとも主様と呼び慕っている真里奈を見て微笑んでいるのか判断のつかない目を向けながら、事の成り行きを見守っている。

「いやいやいや! 冷静に見てないで美九を止めてくれるかな!」

「むん」

言われるや否や、暴走する美九を引き剥がすと、今度は六喰へと手が伸び、それを避けると真里奈へと向かう百合の暴走列車。

「ああ、もう! 朝くらい静かに寝させてってばあああああつ!!」

この光景も、いまとなつては恒例のものであり、止められる・者は誰一人としていなかった。

一通り美九の気が済み、解放された真里奈はリビングへと来ていた。

「おはよう、お姉ちゃん」

「ん、おはよう、琴里」

早々に顔を覗かせたのは、義妹である琴里だ。

真里奈へ振り返った拍子に、二つに括られた長い髪が揺れ、どんぐりみたいな丸っこい双眸が彼女を捉える。

「寝起きから疲れ切ってるね、お姉ちゃん。シャワーでも浴びてきたら?」

あいさつの次にこれである。

(いまの自分はそのままでひどい顔をしているのか?)

疑問に思ってしまう真里奈だが、確かに美九にいろいろされた後なので、シャワーは浴びておきたい。

「じゃあ、そうさせてもらおうかな」

「主様。むくも一緒に入らせてもらうでの。髪を洗ってほしいのじゃ」

「はいはい。じゃあ一緒に入ろうね」

「むん」

嬉しそうにトコトコと先に風呂場の方へと歩いていく六喰。

琴里はその可愛い動作に笑みを漏らしながら、真里奈に声をかける。

「うん、いつてらっしやい! ところで、美九は?」

「ああ、私の残り香がとかいって、人のベッドで横になってるよ。襲われるのも嫌だから放置しておいた」

「ならいいわ」

そのまま会話を終え、脱衣所に向かう。

が、その途中で事件は起きた。

「真里奈さん、お風呂に入るなら私と洗いつこしましょう! もしくは私スポンジでくまなく綺麗にしちやいますよ」

「布団に包まっててよ美九は!」

「これ美九。主様とむくの時間の邪魔をするでない!」

「ええ、私も仲間に入れてくださいよお。いまなら『私とキスできる券』とか、『私に膝枕してもらえる券』とかとか、『私と一緒に風呂タイム券』とか好きなだけあげますからあ」

「いらない!」

「いらぬ!」

「ひ、ひどいですう!!」

悲鳴じみた声をあげる真里奈。

怒る六喰。

泣き叫ぶ美九。

この後、妹の琴里が止めにくるまでに、泣きわめく美九に服を剥ぎ取られかけたのはまた別の話だ。

「あら、そろそろ向かわないと危ないですねえ。真里奈さん、琴里さん、六喰さん。名残惜しいですけど、時間なので先に行きます。また夜に会いましょうねえ」

好き放題していった美九が学校に遅刻すると言って、家を出て行った。

ちなみに、いつてきますの抱擁を！ とか言い出すので仕方なく応じたら、そのまま5分間は匂いを嗅がれた。恐ろしい女の子である。「やっと思ったわね。真里奈、平気？」

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。あれでもいい子だよ、美九は。ちよつと変なだけで、根は優しい子だから」

もちろんウソは言っていない。初めて出会ったときは、それはそれは優しかった。

ただ、親密になるうちに、ある思いを知ってから、もしくはある都合から彼女を救ってからというもの、真里奈に対する彼女の行動は振り切っていた。

主に、理性が。

ある意味正常なのだが、それを受け止めていいものか……。

「いくらこつちで暮らしていくためとはいえ、もつかしらね」

「さあ？ でも、頑張れるから平気」

美九は出てしまったが、真里奈たちはまだ朝食を済ませていない。真里奈が調理を開始したころ、琴里がニュース番組を眺め始めた。六喰は真里奈に結ってもらった髪を眺めながら、時折真里奈に声をかけ、あるいは食器を運んでいた。

それから会話を交え、空間震。空間の地震と称される広域震動現象の話をし、ある事態についての行動を再確認しあった。最悪の場合は、美九と六喰にも手伝いを要請しなければ。

無論、関わってほしいわけではないのだが、それでも、手を借りなければならぬ事態は起こり得るものであり。

「そういえば、今日は中学校も始業式だよな?」

「そうだよ」

いつの間にかリボンを変えたのか、純真な笑顔を浮かべる琴里。

「高校も始業式だけだから、昼時には帰ってくるよ。琴里、六喰、お昼のリクエストある?」

「デラックスキッズプレート!」

琴里が即座に手を挙げながら答える。

内容は、近所のファミレスで出しているお子様ランチだった。

リクエストを聞いた真里奈は、その年でお子様ランチ? と曖昧な表情をしていたが、うちの妹じゃ仕方ないか。とすぐに納得していた。

「じゃあ昼は外食かな。六喰もそれでいい?」

「むん、了承したのじゃ」

「おー! 本当かー!」

「うん。学校終わったらファミレス集合で」

「絶対だぞ! 絶対約束だぞ! 地震が起きても火事が起きても空間震が起きてもファミレスがテロリストに占拠されても絶対だぞ!」

「はいはい。絶対だね」

妹が絶対というのなら、それは真里奈にとっても絶対だ。裏切ることは決してない。仮にテロリストが占拠していても、そいつらを倒して妹と食事にするだろう。

それだけの力と、家族への愛は持ち合わせている。

「主様、むくが学校に通うのは来月からゆえ、一度迎えにきて欲しいのじゃが」

「うん、了解だよ。ごめんね、来月まではお留守番お願いね?」

「むん、任せておくとよい」

あと少し。

まだ学校に連れていくには早いと判断されていた六喰が学校に通えるようになるまでの辛抱だと思いつつ、家に一人にさせることをよしと思わない真里奈は、ことあるごとに六喰に構うようにしていた。「ありがとね」

「むん！」

彼女が浮かべる笑みに救われながらも、帰ってきたらまた、たくさん話そうと決め、登校の準備を進める。

「……せつかくだし、なにも起こらないといいな」

真里奈は一人呟く。

だが、知る由もないだろう。どれだけ願おうと、叶わないものがあることを。

そして――。

彼女はいまも、世界に嫌われていることを。

魔王と天使へと

まったく。どうして高校はクラス替えなぞ行うのだろう。

今年から二年生になる真里奈にとっては大して問題ではないのだが、周りがキヤーキヤーと騒いでいる。それが真里奈にとってはうっとうしかった。

「……とっ」

「きやつ……」

うるさいので、自分のクラスだけ確認し早々と去りたかったのだが、間が悪かった。

調度、彼女とは反対側からクラス表を見ようとしていた少女と衝突する。

「ごめんなさい。怪我不いかな？」

「だ、だいじょうぶです。すいません、私周りを見てなくて」

「いや、私も見てなかった」

衝撃で倒れてしまった少女に手を差し出し、引き上げる。

(へえ……うちの学校にこんな子がいたんだ)

人形のように端正な顔をした、線の細い少女。背を覆う髪は少し色素が薄く、彼女を異国のお姫様のように見せる。美九ともいい勝負だろうか？

「ど、どうかしましたか？」

「ああ、ごめん、ごめん。綺麗だったからつい。いや、本当になんでもないよ？　じゃあね」

マジマジと見ていたことが失礼に思い、謝るのもそこに早足でクラスへ向かう。

そんな真里奈と彼女を、周りの女子生徒たちが羨ましそうに眺めていた。

「五河さんに手を差し出されるなんていいなあ」

「私もさりたい」

「いや、あんたは望み薄いでしょ。やっぱり、折紙さんみたいに綺麗じゃないと……」

「百合っていいわよねえ。あたし、真里奈ちゃんとなら全然いけるんだけど！」

それが聞こえていたのか、真里奈とぶつかった少女——折紙は頬を赤らめていた。

「五河……」

ふと、張り出されているクラス表を確認し、自分のクラスの名簿を順に見ていく。

「五河真里奈さん、か。クラス、同じなんだ」

クラスを確認し終えた少女は、他の生徒の間を早足に抜けていった。その顔は、わずかに微笑んでいた。

一方、自分の割り振られたクラスだけ確認し、すぐに教室に向かうはずだった真里奈は、飲み物を買ってからクラスへと向かっていた。

飲み物は二本。むろん、両方自分用である。

「なんで紅茶なんて買ったんだろ。私飲めないのに……」

理由は簡単だった。

お金を投入する前から、自販機のボタンを手のひらで押していたからである。体重を自販機に預けるようにしていたための悲劇である。

片方は紅茶。もう片方は缶コーヒー。飲めるのはコーヒーだ。では、紅茶はどうするか……それが真里奈にとっては面倒な事案であった。

「捨てるのも悪いしなあ」

それは置いといて、教室についたのは先ほどから五分が経つころだろう。

教室について気づいたことだが、クラスはわかっているにもかかわらず席の確認はしていなかった。

「黒板にあるのか……つと、窓際なんだ。ふふつ、運がいいなあ」

自分の席が窓側から数えて二列目の席だったことに気をよくし、その席に鞆をかけた。

「ん？」

そこで、初めて気づいた。

お隣さんは先ほどぶつかった少女だ。

(さつきは中途半端にしか謝らなかつたつけ。よし！)

「ねえ、あなた——えっと、折紙？」

あなた呼ばわりは失礼かと思ひ、座席表を見直してから呼びかける。

「えっ？」

突然のことに驚いたのだろう。

思いつきり不審がられた。しかし、こういった態度には慣れっこである。

幼い頃や、美九との出会いで鍛えられた精神力はこの程度では折られない。

「さつきはごめんね。これ、折紙の分」

自分が飲めない紅茶を折紙の机に置くと、反応は一切聞かずに席に腰を下ろした。

「え、あ、あの……」

「……」

聞こえていないわけではない。反応を示すのが面倒なのだ。これで紅茶を返されたら、自分で飲まないといけない。

それは真里奈にとって望むところじゃないのだ。

「……」

「……」

それから予鈴が鳴っても、二人の間に会話は無い。

しばらくして、折紙は机に置かれた紅茶を、音を立てずにそつと自分の鞆の中へと閉まったのだった。

「はい、皆さーん。ホームルーム始めますよおー」

目の前の教室から、ここのクラスの担任の声が聞こえてくる。

今日は四月十日。

真里奈の通う来禅高校の始業式だ。

どうやら、担任の先生は生徒に人気があるらしい。先生が入ってきた瞬間、クラス中が湧いた。

そして、クラスに誰がいるのか把握し終えた生徒たち。主に女子生徒が騒ぐ騒ぐ。

「やったわ！ 五河さんがクラスメイトで良かった！」

「確かに真里奈さんかわいいしね！ 一年のときに寝てるときの顔を見たんだけど、すっごいかわいいの！」

「うそ?! あたし的にはいまから水泳の授業が待ち遠しいんですけどおおおっ!!」

口々に感想を述べていく女子達。

クラス内の女子はほぼ全員真里奈の話題に白熱している。解せぬ……。

だが、ただ一人だけ、その輪に入らない女子も存在したのだが。

白髪が綺麗な少女は、真里奈とは全く関係のない方向に視線を向け続けていた。

いや、彼女に関係のあるものをジッと見ていたというべきか。そう、先ほど渡された紅茶だ。

鞆の中に視線が向いている。

ちなみに、真里奈は女子の声が鬱陶しく感じているらしく、ずっと机を枕にして俯いている。

「そういえば、五河さんって鳶一さんと話してたよね？」

「あ、それ見た！」

面倒なことになると悟ったのか、自分の名前が出てきた瞬間にクラスから出て行ってしまった。

それを横目で見ていた真里奈には、出て行った理由がわからなかった。

(…………?)

この始末だ。

普通、あれこれ聞かれるのを恐れ出て行くものだろう。真里奈には、そうした普通の感情が欠落している。

それから三時間後。

生徒たちは、始業式を終え、教室を後にしようとしていた。

——と、その瞬間。

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

教室の窓ガラスを揺らしながら、街中に不快なサイレンが鳴り響いた。

——空間震警報。

(なんでこんなときに)

起こるにしたって、いまであるべき必要はない。

別に、この生徒たちはシエルターがあるから無事だろう。ただ、気がかりになることがひとつ。

生徒は全員シエルターに向かっている。

そんな中でただ一人。

シエルターに向かう列とは逆方向に向かう少女がいた。

「折紙、どこ行く気？」

「気にしなくていい。これは私の問題」

淡々と言葉を紡ぎ、早々と去っていった。

「いまの、折紙？ さつきと全然違うような……」

(もつとおとなしいというか……いや、言葉遣いも違ったかな)

そんな違和感を覚えた。

しかし、それもいま問題にするべきではない。

空間震が絡むということは、自分は否応なしにそこに向かう必要があることを示していた。

折紙に続くように列を外れ、昇降口へと走り出した。

「今度は、争わなといいいんだけど……」

今朝押しかけてきて、滅茶苦茶なことをした少女を思い出す。

避難が完了し、人がいない町を走る。やはり、何度見てもこの不気味だ。そう思わずにはいられない。

体力含め、体のつくりには自信のある真里奈は、全力疾走をしながらも疲れを見せずひた走る。

そうして、目的地につくころ。

真里奈は視界に、何か動くモノを見た。

「……なに、あれ……」

数は三つか四つか。空に、人影のようなものが浮いている。だが、すぐにそんな事を気にしてはいられなくなった。

「うわっ……」

真里奈は大型台風もかくやというほどの風圧に煽られ、後方へと吹き飛ばされた。

「危ないなあ……琴里が人の身体の上で踊るくらい危ない」

自分が思ったより無事な事を確認すると、周りに目を向けた。

「——え——？」

間の抜けた声が、喉から漏れた。

いままで目の前にあった街並みが、一瞬のうちに——跡形もなく、無くなっていたのだから。まるで、隕石でも落ちたかのように。

否、どちらかといえば、地面が丸ごと消し去られたかのように。

冷静になっていく頭が、現状を作り出した原因を探るように、視線を動かす。

「なるほど。今の爆風はこの惨状の余波かな」

言葉とは関係なく、その視線はクレーターのようになつた街の中心にある——否、いると言うべきか。玉座に足をかける、奇妙なドレスを纏つた少女の姿を見ていた。

肩に、腰に輝く漆黒の鎧。そして胸元と下半身を覆うように広がつた、実体のない闇色のベール。

「あの子——そっか、今回はあの子か。見るからに戦えますっつて感じだね」

と、少女が気怠るそうに首を回し、ふとこちらの方に顔を向ける。

「うわあ……」

嫌そうな声をあげた瞬間、少女が目の前に立っていた。

そう、それはクレーターの中心にいた少女である。右手には、剣が握られている。

「……っ!？」

「——おまえも……か」

酷く疲れたような声だった。

「……あなた、は……」

長い間を有し、真里奈は少女に声をかけた。

「……名、か。——そんなものは、ない」

どこか悲しげに、少女は言った。

「……っ！」

そのとき、真里奈は見てしまった。

——少女の目を。

ひどく憂鬱そうな——まるで、今にも泣き出してしまいそうな。自分がそうであったように、世界を啼かせてしまいそうな、目を。

「ねえ、あなたは どうして悲しそうな目をするの?」

真里奈は、少女が危険な存在であるだろうとわかった上で、それでも話しをしたかった。

なんで自分と同じ目をしているのか、知りたかった。

だがやはり、それは否定された。

「貴様に話す必要はない」

「なんで?」

「——うるさいものだ。お前も、私を殺しに来たんだろう?」

少女から発せられた言葉に、真里奈は混乱した。

話には聞いていた。彼女たちがそういうものだ、実際に救った美九のときも、聞いてはいた。けれど、彼女のときはそんな状況には陥らなかった。

(私は、どうすればいいの? この世界には美九と似た——いや、もっと酷い状態の奴が何人もいるの? だとしたら私のすべき事は、やっぱりひとつだ)

真里奈が思考を張り巡らせる中、銃声が鳴り響いた。

辺りを見ると、こちらにもまた奇妙な格好をした人間が数名、空を飛んでいて——あまつさえ、手に持っている武器を少女に向けて構えていた。

(っつて、私ごと!?)

真里奈は慌てて、目の前の少女を連れて逃げようとするが、無論間に合うはずもなく。

「ま、待って待って待って待ってエッ!!」

少女と共にミサイルの餌食になるその直前。

「こんなもの、無駄だと何故学習しない」

少女が手をかぎすと、いままさに発射されたミサイルが圧縮されるようにへしやげ、その場で爆発した。

「た、助かった……?」

なにかをしたと思われる少女へと視線を向ける。

(手をかぎしただけでミサイルが潰された? そんな子と戦っても、勝ち目なんてあるのか?)

空に浮かぶ少女達が束になってかかっても、眼前の少女には全く歯が立たないだろう。

なのに何故、武力で勝っている彼女の方が、あんな目をするのか。

(私は、やっぱり彼女を——)

「……消えろ、消えろ。一切、合切……消えてしまえ……っ!」

少女が剣を振るう。

ガギイイイイイン

だが、剣が振り切られる事は無かった。

「プリン……セス。——倒す。私が」

横から割り込んできた白い少女によって阻まれていたからだ。

最初に目に入ったのは、その装いだった。

しかしそれも当然である。身体の線に沿うように纏わり付いたドレス。満開の花のように大きく広がったスカート。そして、頭部を囲うように浮遊したリングから伸びた、光のベール。——それら全てが、目の覚めるような純白で構成されていたのだから。

「——天使……」

真里奈がそうこぼした。確かに、天使のように見える。

しかし、すぐに気づく。

その少女の顔は。

人形のように端正な顔をした、線の細い少女。背を覆う髪は少し色素が薄く、彼女を異国のお姫様のように見せる。

「おり、がみ……?」

小さな声で紡がれた言葉は、誰にも届くことなくかき消されていった。